



繪本拾遺信長記 二

19
3564
2



門 へ 13
 號 3564
 卷 2



繪本拾遺信長記初篇卷之二

目錄

撰州石山御堂草創之事

尺圖

依く本定教山科の御堂を攻

下岡教上人と大坂(信)の事

神田の御書拜徳

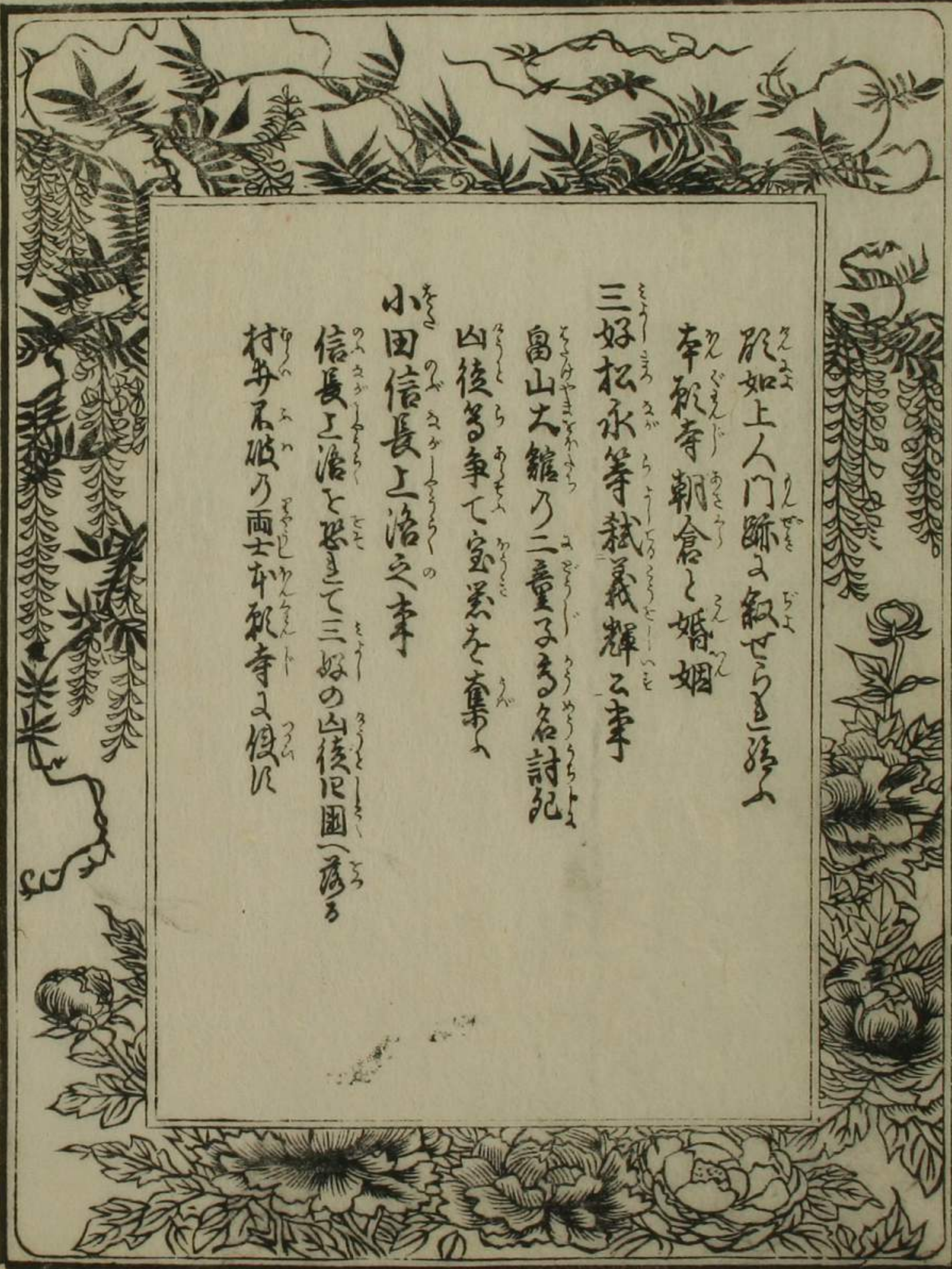
顯如上人本願寺相兼之事

他如上人御即位の料潤進

繪本拾遺

目

早稲田 大學 図書館
 昭 34.6.3 購
 藏 書



於如上人門跡と叙せらるる孫
奉教寺朝倉と婚姻

三好松永等弒義輝之事

富山大館の二重なる名討記

凶徒多争て室を奪ふ

小田信長上洛之事

信長上洛と思きて三好の凶徒に圍はる

村母不破の西本願寺と僧尼

繪本拾遺信長記初篇卷之二

横州石山御堂草創之事

蓮如上人の若狭より丹波迄行経て津國富田の庄より
此の孫の文明九年山城國山科郷の本寺と建立ありとて被
不に越せ給ひ森道西ると力と合せ九年と經る文明十七年御造
營令く調ひ定又信せ給ふより十二年是と山科の御堂と稱し
延徳元年本寺と御八男安如上人の譲り給へし明應元年御造
八十二歳にて京州堰へ御下向ある其時津國肥田天王寺と信で
孫の生玉の庄内石山と云ふと見巡り給ふ何國よりか發面
優なり天臺忽然と於此出上人又向て中々の我け不れ貴
傳と待り既久しけ地教法の極の靈場なり爰又一字乃



蓮如上人



蓮如上人
石山
河津
至鉤

蓮如上人

坊舎と營之要坂の道信と化隆（他力念佛と弘通と云）是則
 上宮左子の勅令ありと云終て紫雲（西天）飛（飛）さうさう
 上人奇異の事ひをばし遂に池（池）と抄ひく一字と建良（建良）終（終）ふ是
 を石山乃浄堂と稱（稱）其後明應八年己未三月廿日山科の
 浄坊（浄坊）と抄ひく浄遷化（浄遷化）何（何）せ終（終）ふ附（附）又浄年八十又歳之第九代
 之幼實如と人本親寺相承（相承）終（終）ひ第十代澄如と人浄年
 僅（僅）二十歳とて実如と人遷化（遷化）終（終）ひ第十代澄如と人浄年
 守（守）が斗（斗）ひ（ひ）又何（何）せ終（終）ふ下間が威勢日（日）く（く）又強（強）く（く）と（と）思（思）ひ（ひ）我（我）志（志）は
 幕加賀團（幕加賀團）下向（下向）知（知）り（り）石の坊（坊）之門（門）後（後）を（を）延（延）集（集）り（り）近（近）園（園）近（近）左（左）を（を）私
 妨（妨）し（し）地（地）改（改）を（を）殺（殺）し（し）郡（郡）主（主）と（と）退（退）歩（歩）切（切）え（え）去（去）地（地）移（移）し（し）く（く）水（水）團（團）の（の）強（強）動（動）去（去）方
 あり（あり）此（此）附（附）又（又）天文元年澄如と人浄年十七歳（十七歳）と（と）終（終）ふ（ふ）浄（浄）附（附）

石山乃合戦出来く山科の浄中を空（空）と（と）に（に）及（及）び（び）ぬ（ぬ）其（其）中（中）来（来）と（と）思（思）ひ（ひ）ぬ（ぬ）
 又（又）江州觀音寺の（江州觀音寺の）燃（燃）る（る）佐（佐）々（々）本（本）六（六）角（角）彈（彈）正（正）定（定）親（親）と（と）つ（つ）ふ（ふ）若（若）あり
 本親寺の家老下間法橋（本親寺の家老下間法橋）其（其）外（外）佐（佐）々（々）中（中）守（守）親（親）登（登）多（多）が（が）我
 志（志）の（の）働（働）き（き）多（多）き（き）より（より）起（起）く（く）本親寺（本親寺）と（と）六（六）角（角）定（定）親（親）た（た）が（が）ひ（ひ）と（と）恨（恨）と
 結（結）ぶ（ぶ）ゆ（ゆ）あり（あり）しが（しが）元（元）来（来）定（定）親（親）の（の）每（毎）二（二）の（の）日（日）蓮（蓮）宗（宗）と（と）て（と）あ（あ）ら（ら）し（し）念（念）
 佛宗門の本親寺（佛宗門の本親寺）惣（惣）宗（宗）せ（せ）る（る）日（日）蓮（蓮）宗（宗）の（の）僧（僧）徒（徒）教（教）多（多）
 かり（かり）し（し）其（其）勢（勢）三（三）ふ（ふ）斗（斗）不（不）志（志）に（に）殺（殺）て（て）し（し）移（移）の（の）浄（浄）中（中）押（押）よ（よ）せ（せ）八（八）方
 かり（かり）五（五）團（團）と（と）火（火）と（と）殺（殺）て（て）寺（寺）中（中）へ（へ）私（私）入（入）と（と）し（し）本親寺の僧徒（僧徒）去（去）又
 終（終）き（き）防（防）ぎ（ぎ）あ（あ）ん（ん）と（と）し（し）も（も）多（多）勢（勢）の（の）事（事）は（は）終（終）文（文）風（風）を（を）け（け）し（し）く（く）事（事）
 字（字）と（と）く（く）を（を）燼（燼）と（と）し（し）が（が）何（何）いて（いて）ふ（ふ）ら（ら）し（し）遊（遊）行（行）る（る）と（と）多（多）人（人）以（以）烟（烟）と（と）む
 び（び）ひ（ひ）足（足）と（と）し（し）爛（爛）と（と）し（し）或（或）の（の）款（款）と（と）斬（斬）倒（倒）し（し）れ（れ）噴（噴）き（き）鳴（鳴）あ（あ）と（と）ま（ま）い（い）目（目）と（と）あ（あ）て



佐々木定頼
山崎の御堂
を去る

河津の兵系居し船にて工人と押田の御軍へ入来りせ款の多
 勢を引上げ一日一夜中あまのれと戦ひたり門後の勢は強
 して終に六角勢切きりては度治れぬと佐右殿方の傍まで
 引くもろふ河内乃門後一万余人佛款とのぞけりて前後
 引包とせんぐよ切まれば討ち者殺と知しは弾正定頼の奉
 志く本津川の方へ引移し又よりや岩田上津屋の門後勝記
 流武者と討ちえとと村雲のどく集り来りて彈正定頼自ら
 ち刀扱そむめ来りて款と七八人切らせ勇と振ふて戦ひたりとき
 のふりの戦ひは身津原を續く味方も何れも遂にけり
 去民のあふ討ちたりされし佐右殿の本の一臺は遠宗の傍後等お
 りひくよ逃きて押田後勝款一人も何れもされし工人糾りて

款は終に是令く門後の傍信長令と惜まぬ款とばし居ると
 それくよ獲兵の御河を揚ひたりとてふ御宗右の御為
 うは令とともろぬ門下のる信男女大地といふにあり勿
 神々の今の御河や戦くごうた悪業原き凡まの令あな七
 む捨さればとく報ぐ盡されぬ御用ふの大急大悪法款退教御
 宗右頼昌承く念佛世は弘らに其切徳りてははしきぶの
 後生のかぐもれたのそあり活如来の工人様へ御恩報の合戦
 ぞやきて款の勢をろろり一番討配して極樂へ成佛せよ
 む難や布やと教百の門後一日は夢を揚て啼々るに殊勝人
 りの次等ありけり討配せし者と工人は表とて母なりし御軍
 軍の御文書と下さるる其御書は曰く



徳 拜 御 田 の

今日乃のつせん二十一人うち記のはしいたえくと
せいのあよびはひえうれどもあやう人のまうこ
を中へきたたのじしをちりびつていうら志ふの
かづぐいごらくれまうあやうとげはらんごる
みうたぐいあくいよくちまうたのこ入い
けうら志ふ乃あともはえらまひくい完賢

八月九日澄如判

控田熱中に

け御書撰州控田村店登及丹屋門方不持して今も毎年七
月廿八日け村の溝中奉教寺へ掲げ出く御門更坐の御
殿と揚るよし案に一方うぬ登とかりきまをたれ上人の

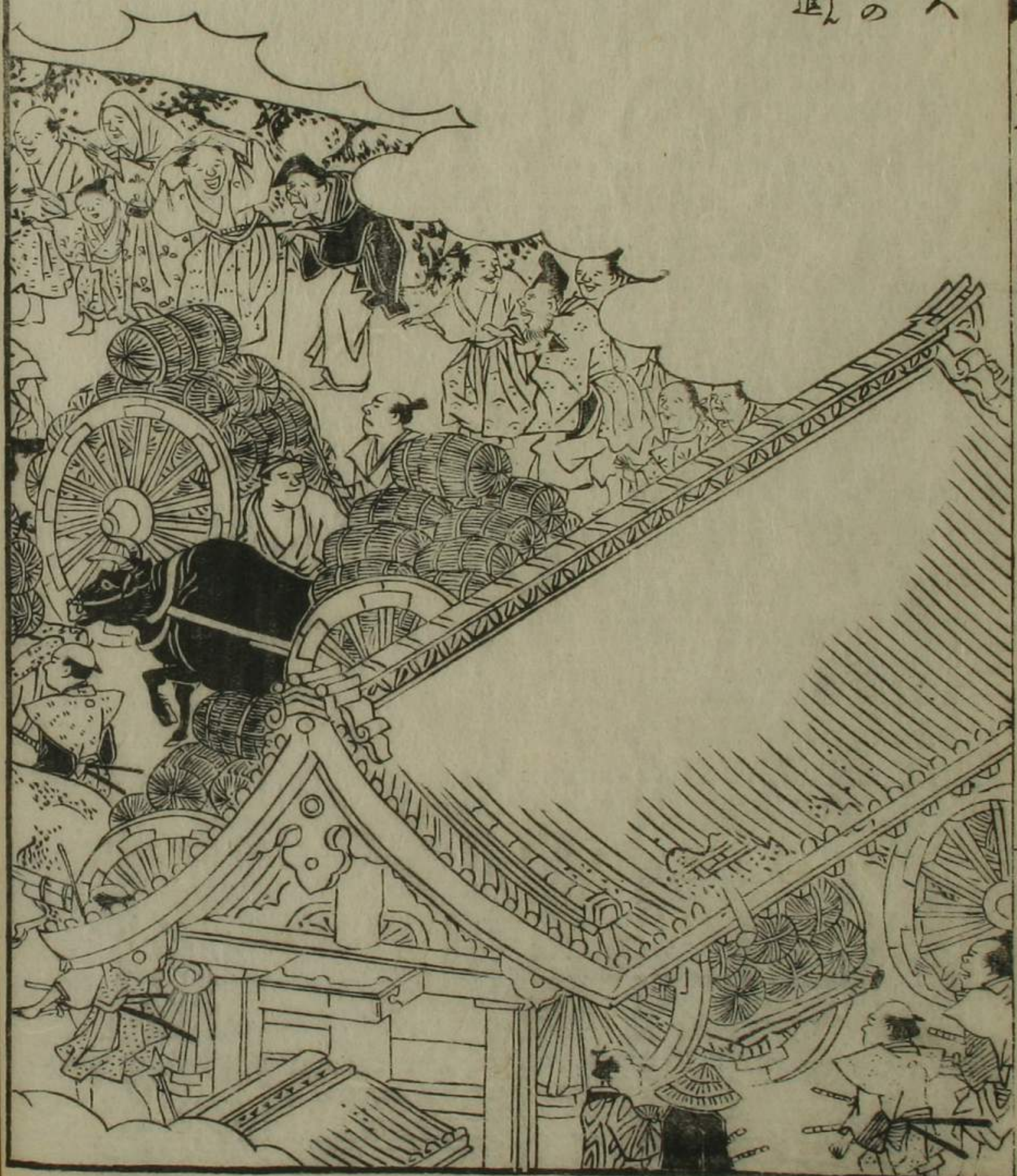
と科の本寺堂とせううに還如と人の建屋し大坂石山
の御堂と修造し是と本と定め終い元祖聖人の御教と
安座いよく宗風度く教導し終いおふに方の道徳日
後系流礼拝し日くの繁栄かきりな

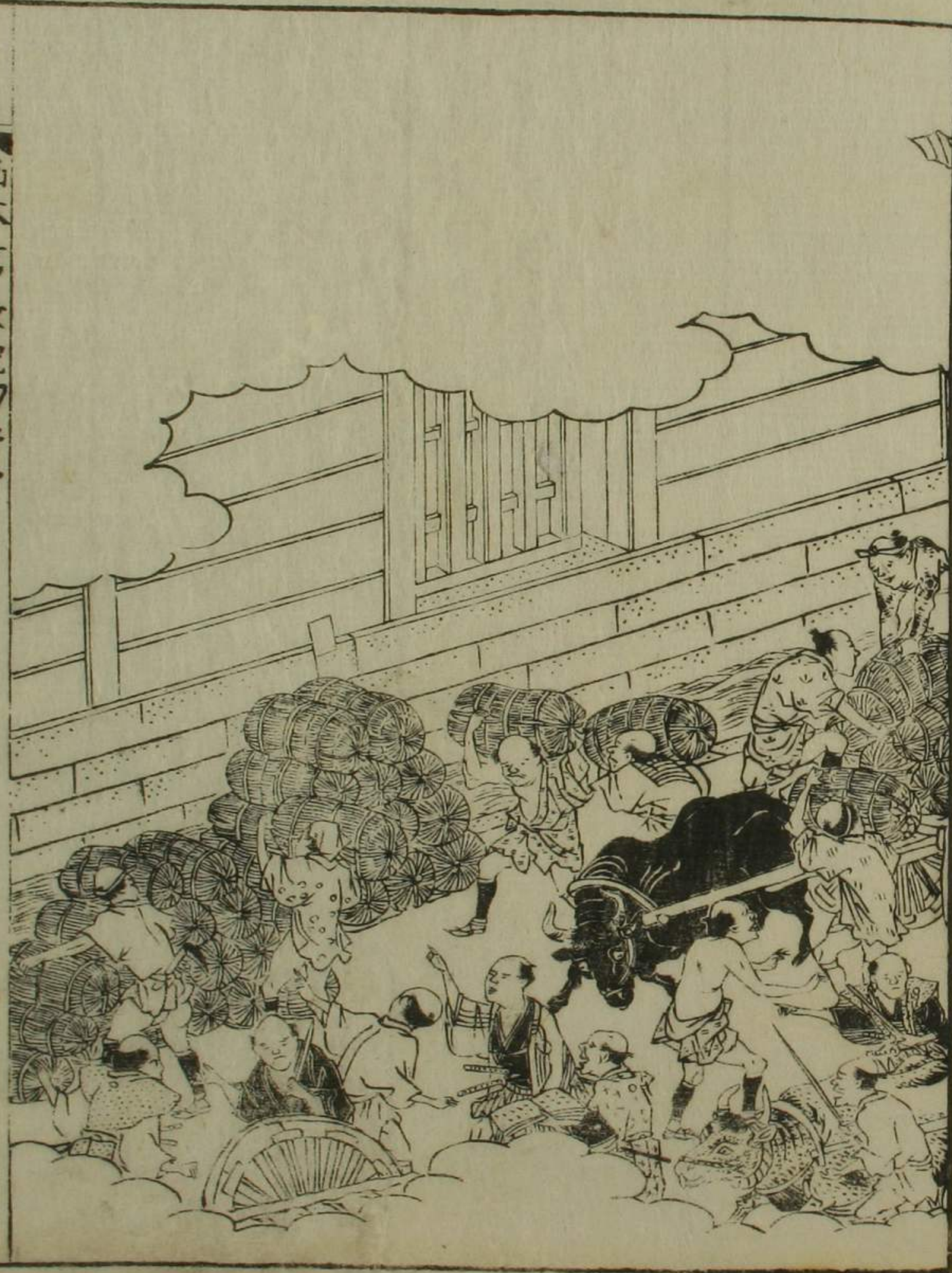
顯如と人奉教寺相兼之奉

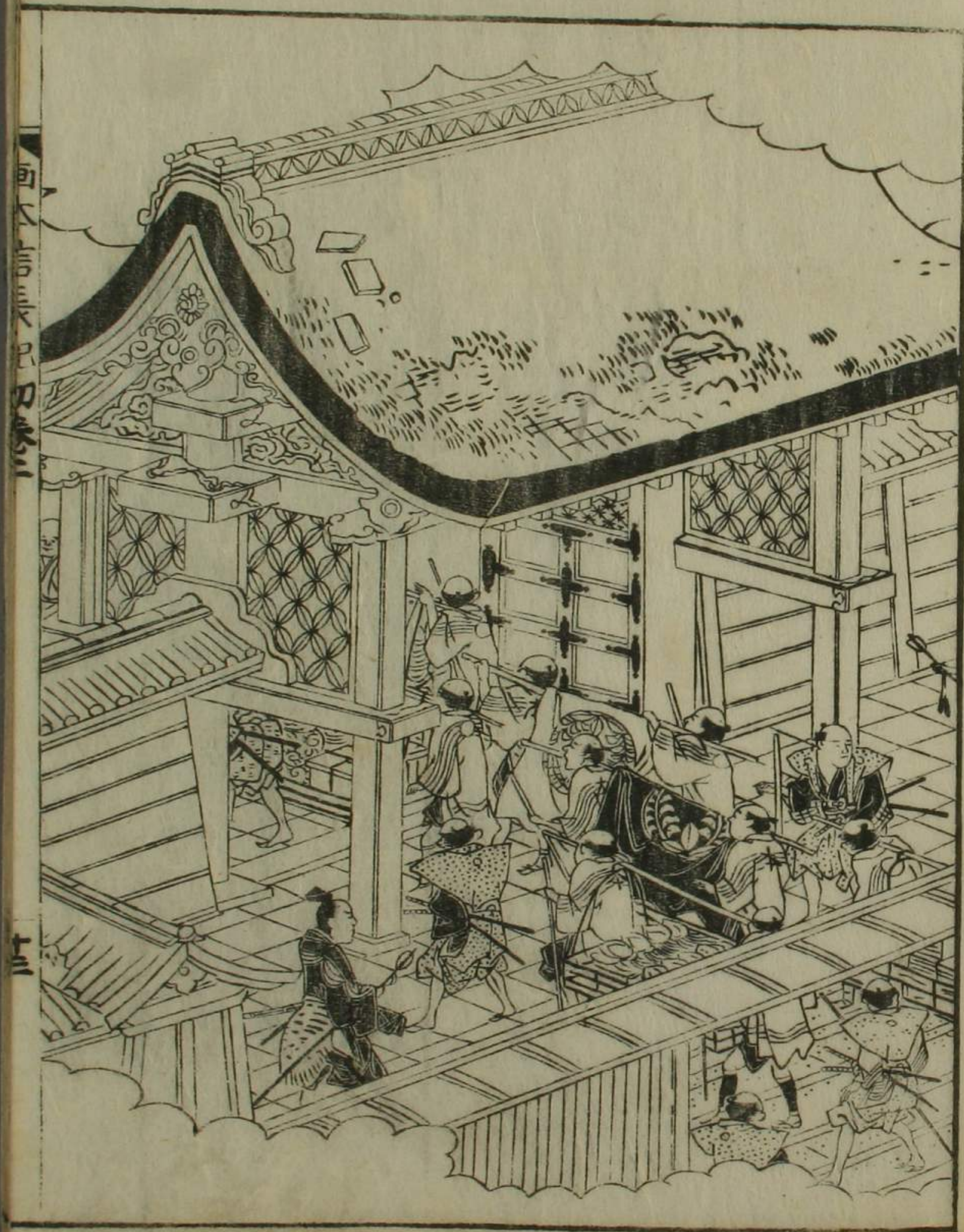
當今後系良院去る大永七年御交禪はしくこれども應仁
文明の比より海一統于世と勅し諸國の群雄蜂起して乱
とんとの入満ははしく我國の世もあしうが御即位の御
礼もいまご執事ひ終りて後々世のありとまかりと本
教寺堂如と人け附いまご御着身は御はしこれども天體賢
徳徳のましくこれが御けけるを歎き終い御即位の御



徳如上人
御即位の
料調進







西の言

三



其三

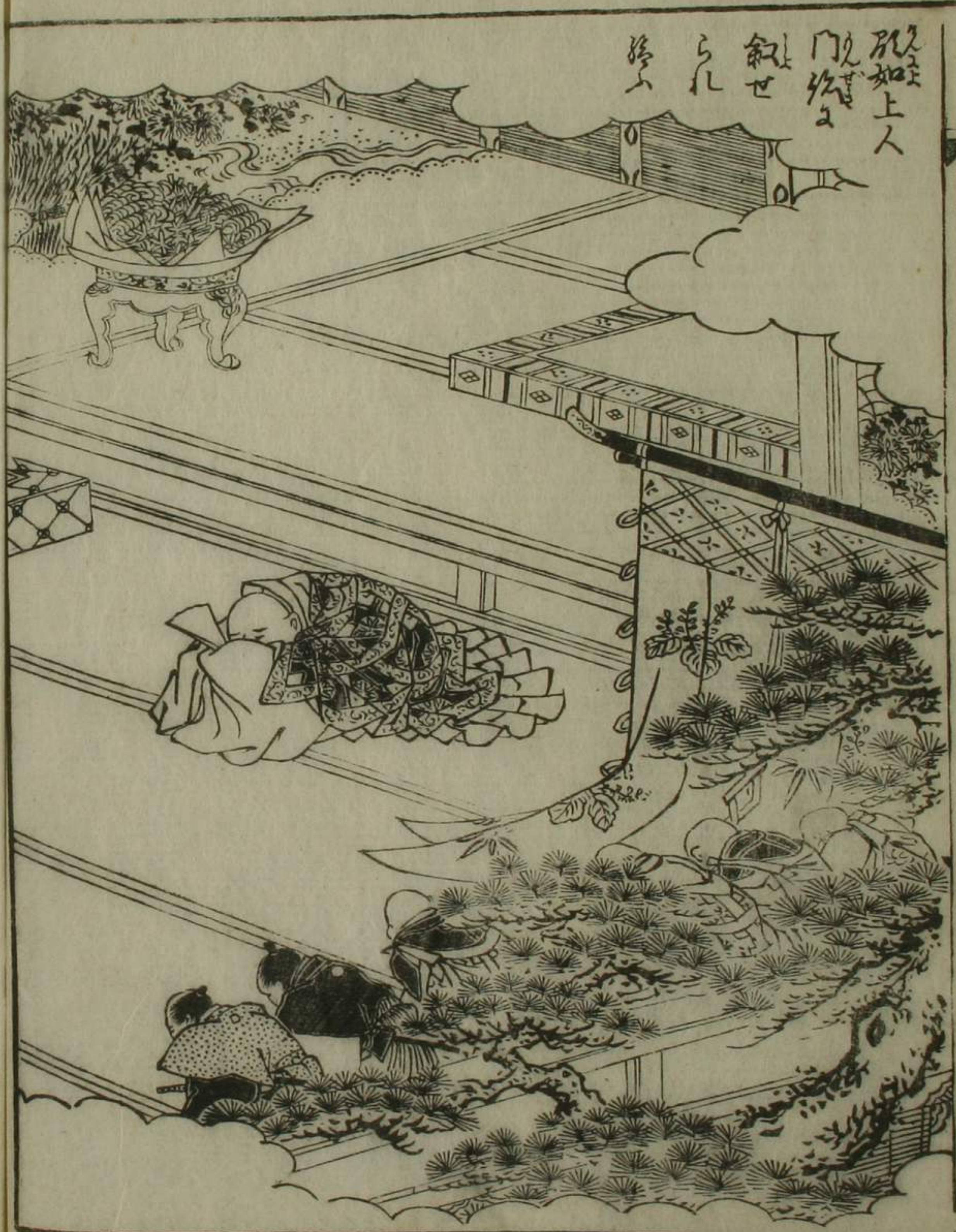


其四

日本外紀卷之三

料と持献し大札と執勢ふるるに旨奏すむるに帝浪りて
 叡感ありてましく式札執勢ふるるに旨と勅定りて天文又五年正月
 廿二日本親寺より菊の料とも調進ありて御即位の式滞り
 たりゆに道しうは上人(勅書を賜ひ法印の大僧正)と但し
 ふさしは上人の大徳海内よき人親密(聖人の宗承)すべく
 廣く諸國の門系恭敬偈仰せ給へり者(其後)天文
 二十三年澄如上人御年二十二歳(て)入寂(終)り(才)十一代の
 法徒を顯如上人と申す(則)澄如上人乃嫡男(御)蓋中(細川
 右京)又晴元(の)息女(後)又如春(尼)と号(す)たりけ(奉)加賀國の
 坊(門)後の(數)二万余人(寄)集り(不)く(此)國郡を(切)て(本)親
 寺の(領)地と(ぬ)れり(後)〔城中の國(畠)山(修理)宗(又)け(一)堂

又本國と美破らまに(而)余(吾)と(ふ)不(不)出(出)奔(奔)〔依(依)く(本)定(定)鎮(鎮)を
 頼(頼)り(て)時(時)節(節)と(見)合(合)せ(せ)ら(れ)い(今)加(加)賀(賀)能(能)登(登)城(城)中(中)の(三)ヶ(ヶ)團(團)一(一)處(處)
 本(本)親(親)寺(寺)の(不)領(領)と(ぬ)り(奉)令(令)銀(銀)米(米)穀(穀)と(大)坂(坂)運(運)送(送)と(る)程(程)と
 本(本)親(親)寺(寺)の(勢)ひ(日)々(又)強(強)く(肩)と(重)る(武)家(家)と(は)勝(勝)濟(濟)と(る)
 門(門)後(後)為(為)城(城)系(系)と(し)切(切)入(入)ん(と)く(團)を(朝)倉(倉)教(教)系(系)入(入)る(宗)禱(禱)と(い
 う)と(我)より(既)又(又)奉(奉)小(小)團(團)の(執)札(札)甚(甚)く(弘)治(治)二(二)年(年)京(京)都(都)に
 軍(軍)義(義)輝(輝)と(り)御(御)教(教)書(書)り(兩)國(國)と(扱)ひ(給)ひ(留)く(合)戦(戦)止(止)
 たり(たる)所(所)又(又)人(人)皇(皇)百(百)七(七)代(代)正(正)親(親)阿(阿)院(院)の(御)宇(宇)永(永)祿(祿)二(二)年(年)本(本)親(親)寺(寺)
 顯(顯)如(如)上(上)人(人)と(し)め(め)り(門)流(流)に(任)せ(ら)る(所)又(又)上(上)人(人)十(十)七(七)歳(歳)なり(是)ぞ
 當(當)寺(寺)の(面)目(目)と(し)來(來)り(の)門(門)下(下)を(庇)ひ(い)と(ま)ぬ(若)り(は)日(日)又(又)奉(奉)の
 秋(秋)又(又)も(や)加(加)州(州)の(門)後(後)為(為)朝(朝)倉(倉)が(下)知(知)れ(そ)む(き)再(再)ひ(合)戦(戦)始(始)まり



久如上人
門徒
叙世
ら
終

日本信長言不卷二

京都の通法外塞ぎくれば未敷の運送なりかきく一方甚く困
 窮は是又依てお軍義輝之け度い大銀左馬門佐武田治助少
 輔五人と上候として御教書と寄し小園より朝倉幸親寺
 の國狀を乞ひ且和賸お遠けりさるは又朝倉義系が女を
 以て於如上人の嫡男茶久丸教如上人の妻合はたた吉浩同せり
 是より双方上より應じ謹で婚姻の盟物を如く後又兩國の
 合戦靜に朝倉と本願寺唐園の因と結び相又急難と助
 け候ふと約せしむ二乃中とは如にたり後季又又尾
 州の大守小田輝正忠信長と石山本願寺於如上人確執又母よび
 十余年の合戦はけ一より後せり元来小田朝倉の妻を
 云方の武臣武衛義廉の老なりしが去る應仁の比山石細川

此をうせ附朝倉家の治部吉美義敏又ん代ありせ至君義廉と
 殺きて云方家の味方又あり終に敏系敏系の守護職を奪ひ云方乃
 東系敏系敏系の國を又推ゆり朝倉輝正忠敏系敏系と名系諸侯乃
 内よりつるより小田家の代に義廉の子孫を主君と仰ぎ尾州法
 例の儀又立置其方の執權として尾州の礼と断る所は信長の
 討つておくれ其形身は討つたり是より又小田家より朝倉と
 逆臣の家と仰り朝倉家より小田を治長と海り文明永福
 又又々々両家確執止ざりたり猶も小田年信長軍勢と率ては及
 高後と美るの急より敏系敏系敏系の朝倉義系に助力と乞朝倉則
 ち高後又一味して軍勢を助りとも又小田と合戦及ぶこと
 づびく之是又依て小田朝倉いよく怨敵と仰ぐお守に責亡

画本信長記初巻三

三



四ノ宮三ノ宮



本願寺
 朝倉
 婚姻

四ノ宮三ノ宮

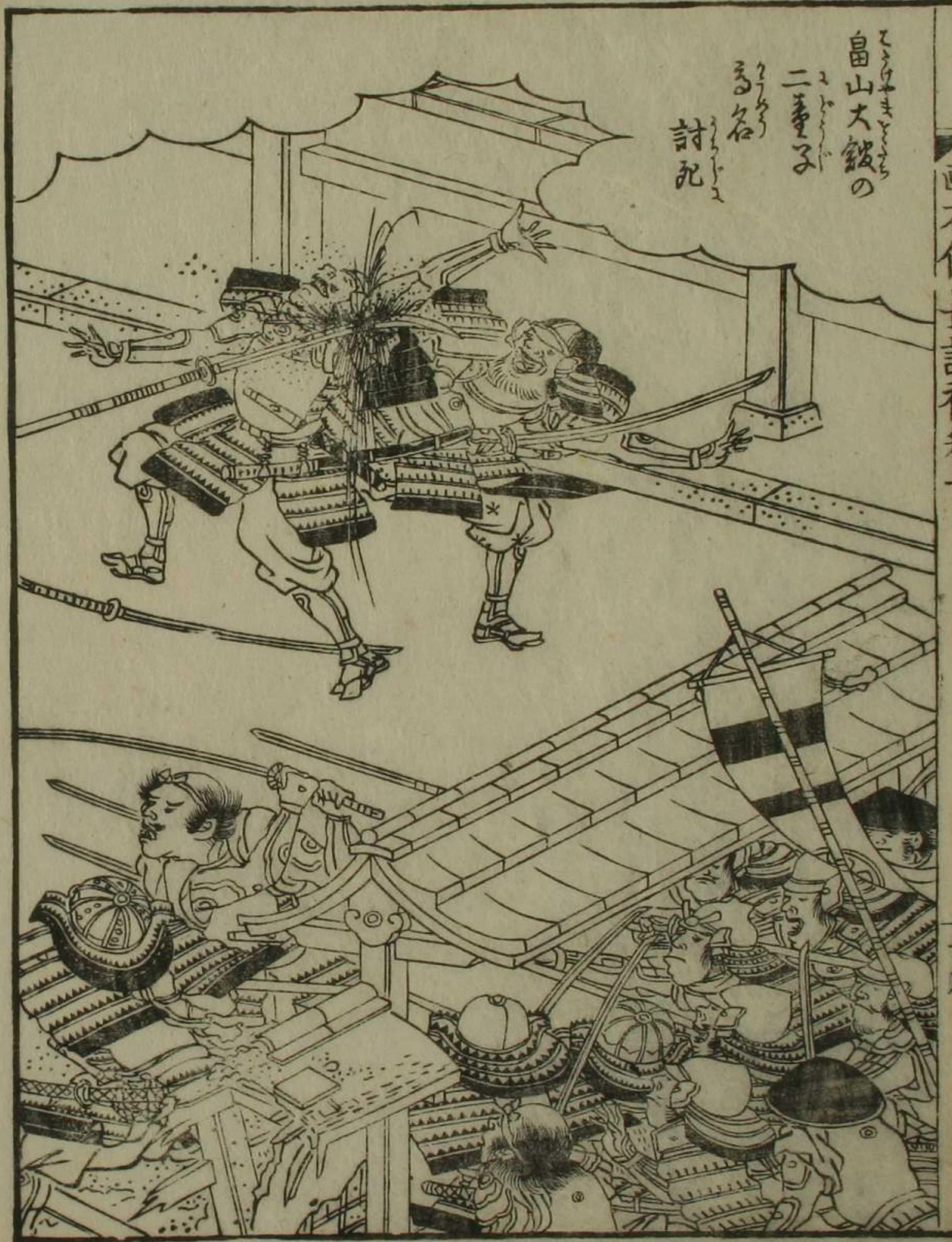
十一

さん斗略の外遊りはしまるる小今度中親寺朝倉家と結び其
 中睦はじき小付くも小國の門後等何となく朝倉家に力と偏
 小回方と要し両家合戦をえ合ふ時川も門後の一揆等横槍と
 入る小回方の妨げをぬせし給小元素志語はすは信長心中より
 甚乞と傍り朝倉と比して後中親寺と中渡し被宗門と被滅せ
 せしゆ今の傍りをとらさんものといまご切事の其時より心内よ
 積しゆと一朝一夕の事やはらうに

三好松永等弒義輝云事

け初足利十三代のお軍義輝云室町の御所に押上りつるがそ乃
 老臣三好日向守日下守松永彈正お彌岩藏を従ひ松永福
 八年八月十八日信長が信と被滅して多勢の人殺を卒し室町の

御構は押上せに方よりえ圍と換砲を打ちけ毎二毎三とまてり
 たり御石中よりは勅番の武士曾代の侍らひ役けぬるれは
 素肌さうに得物追え喰き叫ぶ防ぎ殺ふとふとも凶徒の
 甲冑は身とわらぬ飛及ををひて打ちし御石方の武士押し
 く討死を其の中より畠山九郎十は歳丈被岩る代九十九
 歳素志の被と結びとげ向柄の難力多車と也しむみ
 又向ふ天罰さうに於て殺ひをさひ知れと大為小言つて
 兩人等しく群うたる歌の中へ喰くかけの歌七八語な
 ぎ例し乱軍の中より討死するの事と替ぬ梅の花り
 岩よりろく敷と知りお軍義輝云も今いふよよと
 必しるれいで多勢の軍して被後等が目と覚させんこ



尚家代々持傳りたる名器等宝金銀珠玉を悉く進士に
 傳てより来る敵の中へ瓦礫のごとく投てせ給ふは敵は
 惡業をなする刀羅刀を打捨て給ふは我軍
 んといひしはたゞる將軍これと御説じし御分りばしとの合ふ
 進士十八人左右に引合し嘯と喚ひて切て出陣する羅を十
 文字に切まいし寃業の械堂百人を討殺し人々の押込
 と殿中へのけ入給ひ火と敵に焼とせし後給ひは後擡
 切て矢給ふ三好松永が安心のまふ將軍と鐵なり給ひ
 御連枝の勇と矢ひ給ふせんとい義輝公の御令身周高と申
 御方藤原院におぼしつるは謀りて討たり今一人の勇君
 と南都一宗院の御門に足籠と申せしは次分給ひしは

密に南都と進出せ給ひは夜に到り和同修験寺をたの
 む軍の統と報んと討給ふは日圓親善寺の燃る依り本六角
 左京を美義賢も覚悟の御味方より依り依り給ひは
 とも其他は接園妙義禎却て三好が實は一味は足籠と申
 かりしとんと依り依り給ひは依り依り給ひは依り依り
 き朝倉左衛門尉義系とれと實を送給ひ給ひは新將軍
 昭云と申す義昭公は三年より御説し給ひは依り依り
 弱の悪なりと申すを深き足籠と申し給ひは依り依り
 頼も給ひは時信長足籠の破後と申し破阜の燃る居り
 ぐらけりしを御大に小に給ひ急ぎ新將軍と進出給ひしは
 石向は義兵を揚て三好一家の送械を殊代はる給ひしは



山本信長吉初巻

九



凶後 争 器 宝 奪

山本信長吉初巻

九

云とせしうが義昭も安んじゆく脱走の眉をのろきたすい
何のりもすたえれと物なしゆはし信守ら道幣く英徳よ
通り給ふ

小回信長上洛之事

永禄十一年九月七日小回上洛以信長兵尾張伊勢三國の
軍勢都合二万八千余勢を引率し三好松永退治の爲に兵に
て上洛の道にの國を依り本義復らよ三好は心づれ信
長が上洛を交んと國中の要害十八ヶ所を構へ軍兵と
かつて是とちりせ敵をいそまへり信長は尾智川に陣を居
り敵の結構を伺ひ凡そ十八ヶ所の砦の尾佐和山箕作の
城を敵の要地なりけり不承美濃より入るは敵を石の枝城と攻

せしと爲れしと見極り家臣本下及右即秀吉明智十兵衛
先秀二人を以て両城を攻討むけ本下及右即より面後の如
く長短して醜とくも膽を人々知し一途暗に鬼神もぞ知れ
り敵は兵添ふ不意の英雄なり信長の命と令し一々の勢を
引率し佐和らと押寄せ只すむる美濃に城を築き信長又
敵は明智十兵衛又易者のゆふりけ箕作を攻め一夜の内
に糸衣より信長大に勢ひきりけ勢をいれを美濃やと物
軍一月は押寄せ給ひ依り本軍兵振ひ怒り満方と構へし
砦に或は敵の或は敵の城に或は或は或は或は或は或は或は
大きき勢をき親善寺の城を開きいづともろく敵のより信長
けり白ひてより後三日は一國悉く平均したるは滅し其



日本書紀



小田信長
 上洛の途
 三城の山
 後四山
 あり

勢ひ利刀の竹と破ぐざらういさんで都へ下りて是より後三好
 松永が輩よりよくより濃田の邊に軍勢を傳へ信長と居せば
 一丈もつんとあつじめ其を破り及ひ多るが信長の軍威鬼神
 のごとく速く登りさへはと空に驚き系を引退搦刀留田の
 止り居しが爰にたまりえは阿波乃所義榮とといさうひ
 に國として居のびより信長向きさう歌うく由り京都へ着せり
 義昭とむ久事とせ三好の寄政を改め又畿内と征伐し成功は
 朝輝のてく諸國の大名と居と居し隠伏せる者教を知れば時
 信長日頃の志願大に遂げ臨懐の心いよく強くけ附節と矢に
 比撰州石山本教寺と表崩し頭如子子が首とせんく既軍勢
 をとじ向んとせり是よりが各名の軍し本教寺と表懐くは

世人の議論もむ門はしとく先村丹民都不破河内守あ人を公
 本教寺へ下りて其口より強き信長今度新軍義昭と
 を身獲し逆款三好一黨と誅伐の爲義兵とあけて上洛せる本
 逆後多我軍威と恐をくは國の地へ退散し京都暫く靜置
 又加らうとふも凶徒多いまは流に伏せは彼逆後多軍兵と集
 り要堂といたらし再び上國にて新軍と稱し都と圍ふこと
 必すなり信長つらくもよはけるこの地と武と用ゆり又寔光の
 要害ありけはは畿國の一城と籠きは國の三好一黨をたじめ中國
 九州の朝敵をたじめ系都と平安ししり天子の宸襟と休め
 將軍の爲と抑やうは信長古命と令しは方逆款と云く
 下萬民の途炭と殺ひ天下泰平乃斗膽とあんと然は是保さう



村舟不破の
両土
本親寺
俊氏

村舟不破の

九

